
いなかのこわいはなし

池崎 数也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いなかのこわいはなし

【Nコード】

N9431C

【作者名】

池崎 数也

【あらすじ】

やあ、よく来たね。こんなところにわざわざ来るなんて、君はよっぽど暇なのかな？ だけど、僕も丁度暇だったんだ。だから、少しだけ話を聞いていかないかい？ とある田舎で起きた、事件の話をね。なあに、大した話じゃないよ。ただの小話さ。少しだけホラー風に書いてみた話です。秋の夜長にどうぞ。

やあ、よく来たね。

こんなところにわざわざ来るなんて、君はよっぽど暇なのかな？
だけど、僕も丁度暇だったんだ。だから、少しだけ話を聞いていいかないかい？

ああ、そんな変な顔をしないでくれ。

別に現在の社会に対する愚痴なんて言うつもりはないし、そんなことを憂えているわけでもないんだ。

まあ、ちよつとした小話とでも受け取ってくれば良いよ。

生憎と、ここにはお客人をもてなす物がなくてね。せめて話すことぐらいしか、僕にはできないんだ。

時間が許すのならば、僕の話にでも耳を傾けてくれないかな？

うん、ありがとう。聞いてくれるんだね。

そうだなあ……何を話そうか。あ、君は何か話すことはあるかい？ え、ない？

ははは、そうだね。僕が話すって言ったのに、君に尋ねるのは可笑しいね。

それで、結局何の話をするのかって？

うーん……あ、そうだ。君はホラーとか怪談は平気かな？

あ、大丈夫なんだね。よし、それじゃあ一つ、怪談でもしようじゃないか。

何、大した話じゃないよ。僕は想像力が乏しくてね。だから、実際にあった話を語ることにするよ。

心の準備はいいかい？

いや、そんなに固くならなくてもいいよ。

そこまで期待されても困るし、なんなら聞き流してくれてもいい。ほら、足も崩していいよ。正座じゃ辛いでしょ？

お茶でもあれば良かったんだけど、今日のところは我慢してほしいな。今度会うことがあったら、僕の特製のお茶をご馳走するからさ。

おや、少し話が逸れちゃったね。

それじゃ、また話が逸れない内に語らせてもらおうとするよ。

いなかのこわいはなし

あれはそうだな……もう十一年も前になるのか。

話の舞台になったのは、K県のある町さ。

そこまで目立った観光名所もない田舎でね。

温泉は気持ち良かったけど、遊ぶところもあまりない。地元の学生はどうやって休日を過ごしているんだろう？　なんて思うぐらいの田舎だったね。

いや、実に平和な町だったよ。

道行く人に挨拶すれば、みんな笑顔で返事をくれるんだ。

君も機会があったら行ってみるといい。

きつと穏やかな気持ちになれるから。

おっと、また話が逸れてしまったね。

すまない、久しぶりのお客人だから、つい余計なことまで喋ってしまうみたいだ。

君が聞き上手なのがいけないんだよ？　なんてね。

話は戻るけど、この話は十一年前にさかのぼるんだ。

場所は……そうだね、K県だけじゃ寂しいから、N町と名付けよう。なにはともあれ、N町で起こったある事件について話すよ。

そこは少しばかり山を登った場所にある町でね、人口はあまり多くない。まあ、そもそもその地域の人口自体があまり多くなかったんだけどね。

あるのは点在する住宅と、町の公民館。それと、運動ができる広場があるぐらいだったんだ。

さて、この話の舞台をさらに詳しく教えるよ。

話の舞台になったのは、運動ができる広場でね。正確に言うと、広場の傍にある森なんだけど、そこに一体のお地蔵さんがあったんだ。

森の中にひっそりと、ただ一体だけ置かれた地蔵。何故そこに置かれているのか、僕はよく知らなかったよ。いや、そもそも、そんなところにそんなものがあるってことすら知らなかった。

僕はその町の人間じゃなかったからね。知らないのは無理がなかったんだ。

だから、僕がその地蔵の存在を知ったのはただの偶然。知り合いがその広場の近くに住んでいてね、よく遊びに行っていたんだ。

そしてそれは、僕がその知り合いの家に泊まりに行ったときに聞いた話でね。

知り合いが、突然僕に言ったんだ。

君は、そのこの広場の森に何かがあるか知っているか？ ってね。

僕は首を横に振ったよ。そんなことを聞くのは初めてだったし、そもそも広場自体あまり行かなかったんだから。

知り合いは言ったんだ。

君だから言っておくけど、森の奥に近づいちゃ駄目だからね、と。だから、僕は尋ねた。

それは構わないけど、何かあるのかい？ と。

その問いに、友人は曖昧に笑ったよ。そして、僅かに目を逸らしてこう答えたんだ。

僕も見たことはない。だけど、お地蔵さんがあるらしいよ。

知り合いの言葉に、僕は首をかしげたさ。

何故お地蔵さんがあったら近づいちゃいけないのか、とね。

そんな僕に、知り合いは笑っていたよ。

『ごめん、やっぱり忘れてくれ』

そう言って、知り合いは話を打ち切ったんだ。

特に気になることじゃなかった。だから、僕達はもっと他のこと

を話したよ。

だけどさ、それから四日後。僕はその言葉を思い出すことになったんだ。

何故かって？

N町の隣、H町って言うんだけど、そこである事件が起きたんだ。え？ その事件が何かって？

君は中々せつかちな人間だね。そんなに慌てなくても、ちゃんと話すさ。

まあ、その事件は地元の人間を驚かせたよ。

何せ田舎っていうのは平和だからね。大きな事件が起きることはほとんどないんだ。

だけど、今回ばかりは別だった。なにせ――

『首から上がない』死体が見つかったんだから、ね。

ああ、これは例えでも何でもないよ。

実際に、首から上がなかったんだ、その死体には。しかもね、その首は刃物で切断したような跡はないんだ。ならどうやったのかって？

はは、簡単さ。

――力任せに捻じ切ったんだよ。

おや？ 首を触ってどうしたんだい？

大丈夫、君の首はきちんとついているさ。そんなに心配しなくてもいいよ。

それでね、地元の人達は本当にとて驚いたさ。

さっきも言っただけけど、そんな事件が起きたんだからね。

死因は不明。というか、決められなかった。

被害者を絞殺して、その後首と胴体を切り離したのかもしれないし、捻じ切ったことが死因になったのかもしれない。もしかしたら、じわじわと捻って、出血多量、もしくは痛みによるショック死の可能性だってあった。

だから、死因なんてものは決めることができなかったんだ。すごいよね。力任せに捻じ切るなんて、僕には無理だよ。君はできるかい？

うん、そうだよ。普通の人間には無理なことさ。機械でも使えば話は別なんだろうけど、そんな物はまだ発見されていない。ん？ どうしたんだい、そんな不思議そうな顔をして。

あ、首から上はどこに行ったのかって？

そうなんだよ。この事件の一番の謎は、そこだったんだ。被害者の自宅はもちろん、近隣付近は全て搜索したさ。

だけど、首はおるか血痕の一つも見つけることができなかったよ。しかしね、それは意外なところで発見されることになるんだ。

事件発生の翌日、警察に一本の電話がかかってくるんだけど、電話の相手はN町の人間でね。高齢の男性だったんだ。

そして、その男性は告げた。

『人の頭が、置いてある』

ってね。

最初、警察は何のことかわからなかったよ。

悪戯電話かと思ったけれど、それにしても性質が悪い。だから、男性の話を聞いてみることにしたんだ。

そうしてひとまず男性の話している内に、それが本当なら被害者のものかもしれないということで、現場に巡査を二人ほど向かわせることにしたんだ。

なんですぐに向かわせなかったのかって？

いや、いくら田舎って言っても、野次馬やデマ情報を流す人間はいくらでもいるんだよね。

実際、似たような電話が今まででも何本があったから、警察としてはしょうがなかったんだよ。

おっと、話がずれたね。

何はともあれ、巡査は電話で聞いた場所にたどり着くんだけど……すぐに無線で連絡を取ったよ。

だってそこには、電話で言われた通りのモノがあったんだからね。だけど、それは予想していた形とは違ったんだ。

たしかに人の頭が置いてあったよ。いや、置いてあったっていう表現は正しくないな。

正確には、

『首から上がない地蔵に、首から下がなく人の頭が置かれていたんだ』

え？ 想像できないって？

簡単だよ。お地蔵さんの顔の部分が、そのまま人の首と交換されただけなんだから。

うん、そうだね。これは猟奇的だと言っている。

しかもね、警察の検察はあることに気づいてしまったんだ。

『首の繋ぎ目が、綺麗に一致する』ってことにね。

この事件に関わる人物が三人いるんだけど、それぞれを仮にA、B、Cと名付けよう。

被害者はA君。B君とC君はその友人。

元々B君とC君は、事件の参考人………というか、一応容疑者として事情聴取を受けていたんだけどね。

あ、ちなみに結果は白だったよ？

二人ともアリバイがあつたし、A君を殺す動機もなかったからね。いやはや、日頃一緒に行動していたからって、いきなり警察がきたら驚くと思うよ。

でも、その驚きを上回る驚きが二人にはあつたんだ。

それは、A君の首が見つかった場所を聞いたときのことだったよ。B君とC君が、急に挙動不審になったんだ。

警察の人は、それを不思議がった。

アリバイもあつて、犯人じゃない証拠もある。それだというのに、突然二人が慌てだしたんだからね。

いや、慌てたっていうのはいささか不適切かな。

あれはそうだね、慌てるというより怯えるという表現のほうが合っていたよ。

その様子を見た警察の人達は、やはり二人が犯人だったのかと思うんだ。

だけど、二人はそれを否定する。けれど、怯えるのに変わりはない。

そんな二人の様子に、業を煮やした警察の人は尋ねるんだ。

『いったい何に怯えているのか』

とね。

二人はその質問に顔を見合わせ、何事かを呟き合う。そして、ポツリポツリと話し始めたよ。

それは、三日前のことだった。

広場の近くには居酒屋があつてね、A君達三人が、その店に飲みに行った帰りのときのことさ。

B君とC君はそこまで酒を飲まなくてあまり酔っていなかったんだけど、A君だけは別だった。

浴びるように酒を飲んでいた彼は、へべれけに酔っ払っていたん

だ。

B君とC君は、そんなA君をそのまま帰すのは危険だと思い、酔い覚ましを兼ねて散歩をすることにした。

それで、近くの広場に足を向けたんだ。

そのときはもう夜、深夜と言っても差し支えない時間だった。だから、三人以外に人影はなかったよ。

まずA君をベンチに座らせ、B君は酔い覚まし用の水を買いに自販機へ。C君はトイレへと向かった。

それが、B君とC君にとつての失敗と言えるだろうね。

まあ、A君は酔って眠っていると思った二人を責めるのは可哀相かな。問題は、目を覚ましたA君の取った行動だったんだから。

A君はすぐ傍から友人の声がしなくなったのを感じ取ったのか、ゆっくりと目を開けた。そして辺りを見回すけど、二人の姿はない。

『なんだ、置き去りかよ……』

回らない呂律でそう呟き、億劫そうに立ち上がる。そうして周りを見回して、A君はとりあえず水を飲もうと歩き出すんだ。

そこで目指す場所は、設置されている水道さ。

よく公園にあるだろう？ 上と下に蛇口がついているやつだよ。

とにかくA君は水道まで辿りつき、そのまま思うままに水を飲むんだ。だけど、それだけで醒めるほど浅い酔いじゃなかった。

A君はそのままフラフラと歩き、傍の茂みへと向かいだした。多分、用を足すためだろうね。

ならトイレに行けって？

あはは、酔っ払った人間に正常な行動を求められても困るよ。

だってよくいるでしょ？ そういう人って。

なにはともあれ、A君もその人達と同じような行動に出たんだ。

茂みを掻き分け、先へと進む。

しかし、酔っ払っていても羞恥心ってあるのかな？

まあ、人目につかない場所まで行くんだからあったんだろうけどね。

A君はそのまま茂みの奥に向かうんだけど、そこである出来事が起こってしまうんだ。

何が起きたって？

突然転んだんだよ、A君が。

正確には転んだというよりも、何かに躓いてしまったと言ったほうが正しいね。

夜だから暗いし、茂みのほうに外灯の光は届かない。だから、仕方がないと言えば仕方がなかったのかもしれない。

A君は躓いたことに不機嫌になりつつ、足元にあったものへと目を向ける。

——それは、地蔵だった。

腰よりも僅かに低い位置に安置されていた地蔵に、A君はぶつかっていたんだ。

ところで君は、酒に酔ったことはあるかい？ あれは性質が悪くてね、泣き上戸や笑い上戸なんてものは君も知っていると思う。そして、中には気が大きくなる人がいるんだ。

気が大きくなると言っても、根拠がないのに自分が偉くなったと思う……みたいな感じかな？ とにかく、強気になるんだ。

ちなみに、A君はそのタイプだった。

地蔵にぶつかったとき、痛かったんだろうね。普段のA君なら愚痴の一つで済ますはずのところを、怒って叫びながら地蔵に蹴りを入れたんだ。

丁度そのとき、A君がベンチにいないことに気づいたB君とC君が叫び声に気づいてA君のところへと向かった。

そして二人は見てしまったよ。地蔵の首から上が折れてしまうところを。

その光景を見た二人は慌てたよ。

器物損壊で逮捕……ということもだけど、それ以前に、その地蔵

に心当たりがあつたからさ。

そう、その地藏こそが、僕の知り合いの言っていた地藏だったんだ。

このお地藏さんには曰くがあつてね。一応、山の守り神と地元の人では考えているんだけど、それと同時にもう一つ、ある禁則があるんだ。

その禁則は単純明快。それは、地藏の機嫌を損ねることをしてはいけないということ。

あ、今おかしな顔をしたね。

まあ、気持ちはわかるよ。僕だってそう思ったからね。

しかしこのお地藏さんがまた厄介なもので、何をしたら機嫌を損ねるのかいまいちわからなかったんだ。

機嫌を損ねた人がほとんどいなかった、というのが本当のところだけだね。だけど、流石に首から上を壊されたら誰だって不機嫌になると僕は思うよ。

この町に住む人間なら大抵の人は知っていることでね。B君もC君も、子供の頃からよく聞いていたんだ。

A君は違う町の人間だったから、しょうがないと言えばしょうがないのかもしれないけどね。

B君とC君は、慌ててA君を地藏から引き離れた。そして、逃げるようにしてその場を立ち去ったのさ。

A君はずっと不思議そうな顔をしていたけど、特に抵抗はしなかった。いや、お酒に酔うつていうのは怖いことだね。

——そして、翌日A君は殺されてしまったんだ。

それから一ヶ月ほど過ぎたけど、結局、A君を殺した犯人は見つけることができなかった。

警察のほうは、性質の悪い猟奇殺人として必死に捜査していたみたいけどね。

そうやって、十一年前の事件は幕を閉じたよ。

いや、つまらない話で悪いね。

想像した話を話すのは苦手だから、実話を話すしかなかったんだ。え？ 実話のわけないって？

ははは。いや、君がそう思うならそれでもいいよ。

信じる信じないは個人の自由だし、信じろって強要するわけにもいかないしね。

ああ、最後に一つ。

A君の住んでいたアパートだけだね。

——廊下に、大きな石を引きずったような跡があったんだってさ。

おわり

（後書き）

この度は拙作を読んでいただき、ありがとうございます。この話は以前書いたもので、今の時期には相応しくないですが投稿させていただきます。少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9431c/>

いなかのこわいはなし

2010年10月8日15時29分発行